

## 恩寵の網：『情事の終り』に関する試論

北 垣 宗 治

If this book of mine fails to take a straight  
course, it is because I am lost in a strange  
region: I have no map. (*The End of the Affair*, Penguin, p. 49)

フォークナーはかつて Graham Greene の *The End of the Affair* (1951) について “For me one of the most true and moving novels of my time, in anybody’s language” (ペンギン版裏表紙) と絶賛したことがある。彼がどのような議論の末こうした結語に到達したのかを調べるいとまを持たないが、フォークナーの関心のあり方を私なりに再構成してみることが可能である。その試みから出発して、この作品にアプローチしてみたい。

『八月の光』(1932)の中にリーナ・グローヴという不思議な女性が出てくる。この作品はリーナが大きなおなかをかかえて旅している場面で始まり、出産後の彼女が、子供をだいて、バイロン・バンチとともに聖家族を思わせる姿で旅していくところで終る。彼女は時間を超越した人間である。彼女は少しも過去に捉われていない。過去における自分の行為が現在の自分を苦しめることは少しもない。行きずりの男ルーカス・バーチの甘言にのせられて肉体を許し、妊娠し、バーチの跡を追って旅してまわる彼女は、バーチを信じて疑うことがない。彼女は過去の自分の愚行を後悔したことはない。こういう天衣無縫とでも形容したくなる性格に対照させて、フォークナーは、全く自分の過去、いな自分の祖父以来の過去(とその「栄光」)にとりつかれてしまい、現在を現在として生きることのできな

いゲイル・ハイタワー牧師を配している。時間を超越できるということ、過去による現在の支配から自由を獲得できるということは、人間の永遠の課題の一つであるにちがいない。このような問題意識を背景にしながら『情事の終り』を読んでみると、そこにはこの重要な課題に対するグリーンなりの大胆な挑戦が読みとれるのである。

時間を超越した人物を、フォークナーはアメリカ南部の素朴な娘として描いてみせた。それはいかにも自然なやり方である。しかるにグリーンはそれをロンドンの高級官吏の妻セアラ・マイルズを通してやってのけようとした。これはフォークナーが拍手を送ってもよいほどのチャレンジである。グリーンがこの試みは成功したかどうか？ フォークナーは偉大な失敗にも拍手を送る人であったことを思い出す。

『情事の終り』では語り手はモーリス・ベンドリックスという小説家である。彼は語り手であると同時に、セアラの恋人である。この作品の中心部にはセアラの日記が置かれているため、読者はセアラ自身の書きつけた言葉を通して彼女の性格を理解することができる。（リーナは日記を書かないし、書く必要もない。しかし sophisticated なロンドンの社交界に生きるセアラは、日記を書く理由がある。それは彼女の精神的な格闘の軌跡を示すためである。）読者は先ずモーリスの視点を通して語られる物語から、セアラの像を示されることになる。その視点はしばしば憎しみの色に染まっている。或る日突然自分の前から姿を消した女、自分を裏切った女、そして死後なお自分に影響を与える女に対する名状しがたい感情をモーリスは抱いている。モーリスはセアラと自分との間の情事の顛末を語り、セアラの日記の中の重要な部分を呈示するのだが、面白いことに、語り手のモーリス自身はセアラを完全には理解していないのである。語り手には自分の語っていることの本当の意味がわかっていないということがしばしば起こる。げんにモーリスは、サヴェッジ探偵事務所のパーキスが盗み出してきたセアラの日記を読み終ったとたんに、彼女を全く誤解していたこと

が暴露される。日記がモーリスにもたらしたものは、より深い理解というよりは、より深い誤解であった。この皮肉の背後にはいったいどのような事情が横たわっていたのだろうか？

結論を先に言うならば、日常生活の世界を超越する究極的な次元のセンスが、モーリスには欠けていたのである。このため彼はセアラの行動をも、動機をも理解できなかった。いな、彼自身の identity すら理解できなかったといってよいだろう。グリーンはこの究極的な次元を表現するために、大胆ではあるが非常に注意深い工夫をこらしている。そのためにはいわゆる「奇跡」という小道具を使うことさえ躊躇しない。特にセアラの死後、パーキスの息子や無神論者スマイスにおこる一連の奇跡は読者にとっては躓きの石かもしれない。もし奇跡の問題をあげつらうならば、作品の最後のところで、ヘンリーとモーリスという、一人の女を夫として正式に所有した男と、情事という形で非公式に(!)所有した男とが、仲よく一つ屋根の下に暮すようになったことこそが最大の奇跡ではなからうか？ 奇跡という言葉の乱用かもしれないが、私にはグリーンがセアラという特異な女性を創造しえたことが、時には、奇跡に思えてくるのである。何となればこの姦淫の女、夫以外の男とあれほどしばしば性行為にふけり、我を忘れた女を描いておきながら、読者に何のいやらしさ、嫌悪感をもおこさせないという芸当をグリーンはやってのけるからである。この秘密を解明するためには、セアラの性格にもう少し綿密に光をあててみる必要がある。

セアラの性格を特徴づける第一の点は「瞬間性」である。瞬間が過ぎればその瞬間を忘れる。一種の刹那主義である。彼女にとって「事が終わったなら、それは終わった」(“... when a thing was done, it was done.” p. 49) のであって、後悔も罪の意識もおこらない。この性質は姦淫の女にはまことに好都合である。それに彼女はよく眠る女だった(“... she was a good sleeper” p. 11)。罪の意識はしばしば人を不眠にする。セアラのぐっすりの眠りは、彼女が罪の意識を超越していたことと密接な関係

がある。セアラはモーリスと密会を重ねている間にも、夫のヘンリーに対してすまないという気持は殆ど抱かなかつたように思われる。しかしながら、セアラはヘンリーに対しても忠実だった、とモーリスは繰返し述べている。

セアラの性格の第二の特徴は基本的な真摯さである。これはいわゆる「マジメ人間」といった意味ではない。マジメ人間ならば姦淫する筈がない。彼女には決断し、それに固執する真摯さがある。あのロケット砲の爆撃のあった早朝、「死んだ」モーリスのために、「もう一度生きるチャンスを与えて下さい、そうすれば私は彼を永久にあきらめます」と、「知られざる何者か」に向かって必死になって祈ったのはセアラであった。やがて血まみれの顔をしたモーリスが戸口にあらわれる。セアラはその誓約の故に、モーリスの眼前から姿を消す。この『情事の終り』の中心をなす出来事は、彼女の基本的なまじめさを徹底的に証明するエピソードである。基本的まじめさは、人間の真価につながる何ものかであって、すべての人がそれを所有しているわけではない。（フィッツジェラルドは『偉大なギャツビー』において、基本的まじめさを欠く二人の女性、ダイジー・ビュキャナンと、ジョーダン・ベイカーを見事に描いてみせたのであった。）

第三の特徴は、自分の存在を他にあずけることのできる、幼児のような信頼の念（極端には *abandonment* の能力）である。幼児はふつう親に完全に頼り切っている。彼は親が自分を裏切るなどとは夢にも思わないし、「裏切り」という考え方は幼児には不可能である。このたより切れる性質は幼児の特質であり、幼児は成長するにつれてその特質を失っていく。幼児のこの性質は第一の特徴と関係があることはもちろんである。幼児は瞬間を生きる刹那主義者であり、罪の意識をもたない。幼児はよく眠る。セアラの中のこの性質は、彼女の日記が微妙な仕方であきらかにする。モーリスに身をまかすことのできた彼女は、やがて神に身をまかすことができるようになる。

第四の特徴は強い共感性である。この共感性が彼女を人々と結びつけた。人々の心の中に彼女を忘れがたく印象付けた。彼女は他人の不幸、他人の苦痛を見るとじっとしておれない。彼女は神が存在しないという確信を得るために無神論者のスマイスを訪問する。しかしスマイスの議論は皮肉にもますます神の存在を彼女に確信させることになる。その上彼女は、スマイスのはおの赤いあざが彼の心の傷であることをさとる。彼女はついに或る日、彼の苦痛の象徴である赤いあざに目をつぶって接吻する。それはスマイスの苦痛を自分の苦痛として受けとめようとする象徴的行為であった。モーリスの自虐的な言行の一つ一つを彼女は感じ、彼女の心はうずく。断然ヘンリーの許を去って、モーリスの許へ走ろうとした瞬間に、ヘンリーが帰宅し、はなはだしく懊悩している状態を見て、彼女は家出をかううじて思いとどまる。彼女にとって、家出は殆ど最終的な神への挑戦であったけれども、彼女の願いは斥けられたのである。

以上私はセアラの性格の特徴を四つあげたが、この記述はセアラ・マイルズという不思議な、魅惑的な性格にまことに不完全なラベルをはったにすぎない。性格は完全な仕方では規定することはできない。結局、そのような性格に光をあてるのは、平板な記述よりは、その性格がおかれたドラマ的状況を通してである。1944年といえは第二次大戦の末期である。結婚して15年になるがヘンリーとセアラの間に子供はない。ヘンリーは妻を習慣的に愛してはいるが、二人の間にはもはや長年にわたって肉体の交渉はない。セアラは美貌と肉体にめぐまれていた。そういう状況で、モーリスとの恋愛関係は斜面をころがる球のように速度を加えていく。ここで重要な歴史的條件は、ドイツとの戦争末期のロンドンの、やり切れないような霧囲気である。空襲やVIの砲撃にさらされながら、人々は毎日死ととなりあわせて生きているのであった。この霧囲気は「砂漠」という言葉で表現されるにふさわしい。砂漠は無限に広がっている。砂漠の住人たちは相寄り、相助け、相慰めることによって、瞬間的にもせよ、砂漠を忘れることがで

きるだけのことである。（砂漠のまんなかでは、夫婦でない男と女が会い、抱擁し合ったところで、それがどうしたというのか？）これは、いってみれば世界史の中におこった一種の限界状況なのであった。明日の命もわからない、不安そのものの中であって、安易な、安全な日常性はすべて拒否されている状況である。このような限界状況の中ではじめて、人間は飛躍の可能性を見出すことができるといえよう。『情事の終り』の経験はグリーンにおける飛躍の可能性の探究として捉えることができるであろう。

この物語の中心的な出来事はいうまでもなく二人の情事の終りである。これはモーリスの側からと、日記を通してセアラの側からと、二通りに語られている。モーリスの方はあの経験を、VIの炸裂による強烈な衝撃による一時的な人事不省状態であったと、合理的に理解している。それは僅か5秒間であったようにも、また5分間のことであったようにも思える。しかし、我に帰ったときには今までとは「ちがった世界にめざめた」(p. 69) こと、しかも「不安、嫉妬、心配、憎悪から完全に自由となり、心は全くのブランクな白紙状態で、誰かがその上にこれから幸福のメッセージを書こうとしているかのようであった」(p. 69)。モーリスの内部の合理主義者は因果関係で理解しようとするが、彼の中の正直さは、それがあたかも使徒行伝の中のダマスコ途上のサウロにおこった経験を暗示するものを感じているのである。一方セアラは、モーリスは死んだと直観した。彼女の理屈は、愛人同士であれば一度のキスの中に愛がどの程度含まれているかを読み取ることができる。いわんや彼女の場合、ヒステリー状態にあったとはいえ、愛するモーリスの手の中に生があるか死があるのか、識別できなかったはずがない、ということである。彼女は彼が死んだと思ったからこそ、はだかのままであの必死の祈りを捧げ、たなごころに爪をくいこませることによって苦痛を身に受け、さらにはモーリスを永久にあきらめるという最大の苦痛をとまなう誓いをたてたのである。これは自己の全存在を賭けた決断であった。「死者をよみがえらせる」という不可能を可能にし

ようという願いなのであった。

セアラはこの日から18か月以上モーリスに会うことがなかった。彼女はむろん聖女のようにとじこもって祈りの中に毎日を送っていたわけではない。その逆である。モーリスに会えない苦痛の中で先ず、あの誓いを馬鹿げたものであったと考えようとした。しかし彼女は合理主義者になれなかった。彼女は神の存在しないことを確信しようとしてスマイスに近付いたが、スマイスとの接触はますます神の存在を確信させるという皮肉な結果をもたらした。彼女はモーリスに会おうとして電話してみたが、彼は不在だった。神に復讐するために、ヘンリーの上司のダンスタンと関係をもとうとする。地下防空濠をヘンリーと一緒に視察した時には案内の warden 相手にいちゃついてみたりする。いずれも情事にまで進展しない。この18か月間、彼女の方から、誓いを破ろうとする試みは、一貫して何者かによって妨げられたのである。（モーリスの側からの同様の試みもまた妨げられていた。）その妨げた者は、結局セアラのあの日の必死の祈りを聞き入れた神であることを彼女は認識せざるをえなかった。セアラは神との格闘の中で、神への憎しみを感じ、それが神を信じることと同じであることを認識する。そして或る日ついに教会堂に入り、じっとそこにいて肉体の意味、愛と憎しみの不可分の関係等について省察する。そしてはじめて聖水盤に指をつけて、ひたいに十字を切る。

それから3か月ほどすぎた1946年1月10日、セアラがどしゃぶりの雨の中の散歩から帰宅してみると、モーリスがきていて、ヘンリーの部屋で一緒にウィスキーをのんでいた。それをセアラは、神にむかって「あなたが彼を私に返して下さったのはこれで二度目です」(p. 111)と日記に書いている。小説の冒頭の章はモーリスの側からこの日のことを書いたものである。しかし、恐らくこの日の雨の中の散歩は、彼女の風邪を誘発し、それが遠因となって彼女は死ぬ。

セアラの行動を跡づけてみると、そこに究極的な次元が介入しているこ

とを否定できない。神学者であればここで人間の時間性の中に切り込んでくる神の永遠性（キェルケゴール）という表現を用いるかもしれない。しかし私はここで私なりのもっとどろくさい比喩を用いて説明しようと思う。それは神の「恩寵の網」という比喩である。人間をすなだめる者である神は、龍大な網をひろげてまちかまえている。それは天界から地上の世界へぶらさがっている見えない地引網である。ライ麦畑の彼方に誰かがいておこちる子供を受けとめようとしている絵よりははるかに壮大な絵といえるだろう。恩寵とは人間にメリットがないにもかかわらず、神はその人間を救うということの意味する。人間はその罪性にもかかわらず、なお救いの可能性をもつ存在である。『情事の終り』のセアラ・マイルズはこの恩寵の網にひっかかった。その網の中にいることを彼女が自覚するのは、彼女の必死の祈りの結果、モーリスが戸口にあらわれた瞬間であった。恩寵の網の中にいったん入ると人間はもはやそこから逃れることはできない。逃れようともがけばもがくほど、その網の目はますます彼をしっかりと捉えてしまうのだ。ただし、これが恩寵の網であるおかげで、その中の人間は、なお自己の古さの残渣の故に、人間的な、あまりに人間的な弱音や不平を述べることを許されている。その弱音、不平、不満は、一切網元の方で吸収してくれる。網元はセアラが苦痛を求めた時に、平安を与えてくれたのである。いな、そこでは喜びも悲しみもすべてが網元との対話になる。網元への反逆もやんわりといなされる。セアラの日記の最後の記入は次のような甘えた、切ない、人間的なものである。（モーリスがこの箇所を全くまちがって読んだのも無理からぬことである。）

I just want him [Maurice] like I used to in the old days. I want to be eating sandwiches with him. I want to be drinking with him in a bar. I'm tired and I don't want any more pain. I want Maurice. I want ordinary corrupt human love. Dear God, you know I want to want Your pain, but I don't want it now. Take it away for a while and give it me another time. (p. 87/p. 121).



そこでついに2月のみぞれの夜、モーリスは病気のセアラを偽名を使って電話に呼び出し、むりやりに会おうとする。セアラは遂に雪の中にとび出し、モーリスがこれを追う。やっと教会堂の中でセアラをつかまえる。教会堂は恩寵の網の比喻では恐らく最も安全な、網元の住み家をさすのであろう。「あんなにぼくから逃げようとしてはいけないよ」というモーリスに対し、セアラは「わたしが逃げていたのはあなたからじゃなかったのよ」(p. 127)と答える。ここにもまた、網の中で魂の格闘を経験している彼女の姿がある。彼女は網元から逃げて、結局網元の家にとどりついた、とさえ言えよう。この出来事から二、三日たって、モーリスは突如、ヘンリーからの電話でセアラの死を知らされるのである。

この作品では恩寵の網の中に入っているのはセアラだけでないことはもちろんである。「地図のない、不思議な領域」にいることを実感しているモーリスもまた同じ網の中にいた。旧約聖書の記者であれば、1944年6月17日のモーリスの経験を卒直に次のように表現するであろう。「この朝早く主はモーリスを打たれた」(In the early morning the Lord smote Maurice.) 気がついた時彼は仰向けに横たわっており、二、三インチ上にドアがぶら下がっていた。そして、まるでドアの影によって打たれたかのように肩から膝にかけて怪我をしていた (p. 69)。この影という言葉は象徴的である (“Between the emotion / And the response / Falls the Shadow”)。この影の感覚はモーリスが知覚した以上に深い出来事のしるしであったのではあるまいか。私はすでにそれを、ダマスコ途上のサウロの体験と呼んだ。

モーリスはセアラとの関係を通して、恩寵の網の中に引き入れられていく。18か月後の再会後、パーキスの助けを借りながらモーリスが追跡する彼の「後任者」X氏は、神であったことを彼はさとるに至る。彼が知らないで追っかけていた相手は神だったのである。彼はセアラを奪った神を憎んだ。しかし神に対する憎しみを持つ人は、すでに恩寵の網の中に居る。

それでもはやそこから逃れることはできない。彼は捉えられた人なのである。『情事の終り』の終りではヘンリーとともに一つ屋根の下に住んでいるモーリス、嫉妬から解放されつつあるモーリス、他人のトラブルに頭をつっこんでみてしばしの幸福感と平和を味わうモーリスの姿が示される。ヘンリーと一緒にビールを飲みに出掛けるモーリスは、冬のムードにぴったりの祈りを思いつく。この小説はそのつぶやきのような祈りで終るのだが、それはやはり網元に対する、人間的しんどさの告白であり、訴えである。恩寵の網の中にいる者は網元にいくら甘えてもよい、網元をいくら呪っても、憎んでもよい。その訴え、呪い、憎しみは網元の旦那に向けられている限り、それをまるで「祈り」同様に受容れてもらえる。セアラが先ず、そしてモーリスが次に、砂漠の中に網元がいたことを発見した。網元は苦悩の中にいた。網元は愛の中にいた。このようにしてグリーンは、神を喪失した現代を、神とその恩寵に気づきにくいがなお気づきうる状況として呈示したのである。